

DAIDAI

藥師慈 圭



たしかにガザガザだった
ひび割れたあなたの両手
握手をして

すぐに引っ込めてしまったけれど
恥ずかしそうに

すぐに引っ込めてしまったけれど

なんてすばらしい手だったのだろう

働く男の手だ

その手で生み出されたものは

こんなにもきれいな花束

この世で最も美しい作品たち

店に溢れるたくさんのほほえみ

幾人の人の胸に届けられたのだろう

あなたの傷んだ手から生まれた幸せの粒は

終わらない夢の続きのように

今日も生まれ もらわれてゆくのだ

フローリスト

薬師慈 圭

駅

薬師慈 圭

その駅を通りかかったとき

不意に思い出したのだった

遠い昔に 何度も降り立った自分を

パステル色の 輪郭のぼけた笑顔を

地下鉄から階段を上がり

うすら明るい曇り空を見上げた

もうひとつ先の角だったかもしれない

いい思い出とは

こんなにも甘酸っぱく胸にこみ上げるものか

思い出せないことばかり

思い出したくないことばかり

目を伏せ横を向き 生きていても

ときに思い出とは

自分をふんわりと

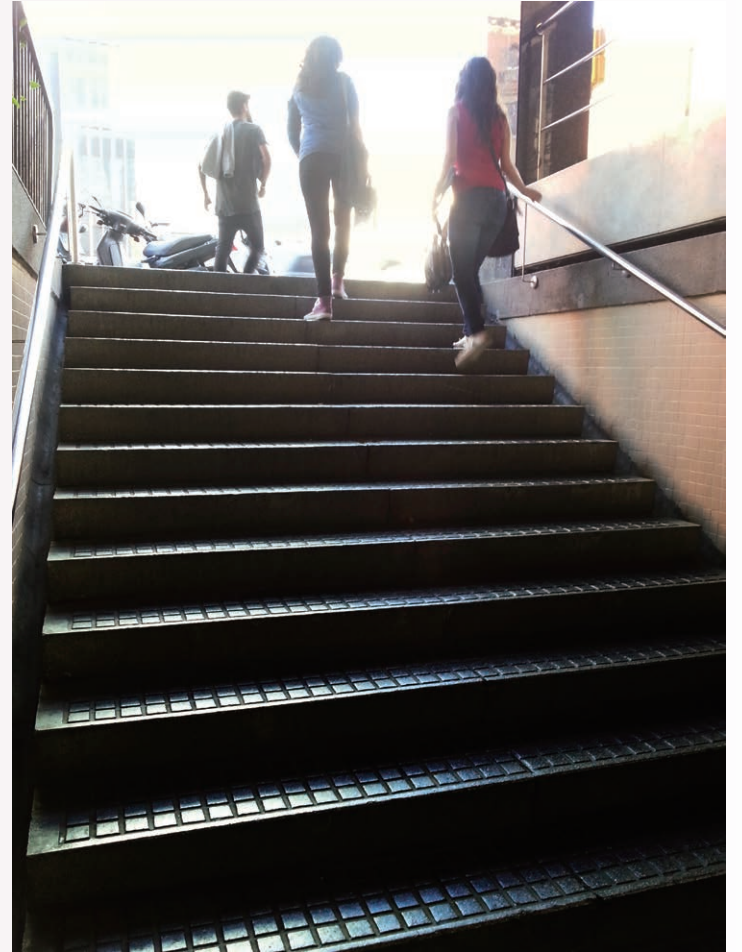
こんなにも優しい気持ちにしてくれるものか

今日は その角を曲がってみようか

どんな風景が広がっているか

次のかけがえのない思い出につながる

そんな気がして



前へ

薬師慈 圭

後ろに目がなくてよかった

見たくないものを見ないで済む

例えば

舌を出しているA

じっと睨んでいるB

中指を突き出しているC

そんなもの 見るものか

わたしはふうつとため息をつく

ため息だってほら

前にふわっと出るじゃないの

そう

わたしはなんだって前へ

後ずさりする力があるなら

足を1センチだって前へ伸ばそう

そうやって生きるって 決めた



穴

薬師慈 圭

引き返そうとは思わなかったの？

何度も思ってたわ

引き返せばよかったじゃないか

そうかもしれない

ここまで迷い込んで？

いいえ 迷ってなんかないわ

なぜ 君はついてきたの？

好きになってしまったから

では 仕方がないね

そう 仕方ないの

二人は

お互いの目の奥に

深い 小さな 穴を見つけた

けれど

もう目をそらすことができなかったのだ



自尊心

薬師慈 圭

とほうもなく大きな森の先に

だいだいの光をみつけたら

走って行きたくはない？

たぶん わたしは

今そんな風に息をしているの

とてつもなく大きな海の底に

だいだいの光をみつけたら

潜って行きたくはない？

たぶん わたしは

今そんな風に震えているの

だから 深呼吸をして

いってきます

みつけたんだもの

おきざりにはできない 私の自尊心

わかったんだもの

一体 何色だったかって





生きる

薬師慈 圭

生きるって

どこか 哀しくて

でも どこか 美しい

生きるって

どこか 淋しくて

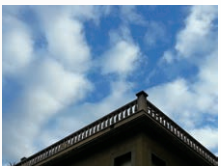
でも どこか 素敵だ

ねえ

だから

生きよう

生きようよ



暗号

薬師慈 圭



ボクはサイゴニ 短いメールを打ったんだ

42219

キミに通じるのかわからなかったけれど

ベツに通じなくてもよかったけれど

打ってみた

(ヨンニイニイイチキュウ

シイニイニイイチク

シニニイク)

ただ 知らせてみたかったんだ

電源を切ろうと思ったけど

指がぶるぶる震えて 切れなかった

ケータイを握りしめたまま

苦笑いをして

屋上の上って行った

空が 青くて

どこまでも 青くて

不覚にも 涙が 出た

喉が 乾いて

からからに 乾いて

思わず 咳きこんだ

ああ 苦しい

咳きこんで思ってたけど

ちがうだろ

今日までが苦しくて

ここまで上ってきたんだろ

混乱した頭を抱え込んだまま

ボクは ケータイを屋上の床に置いた

これで サイゴだ

そのとたん 鳴ったんだ

おまけにバيبまで震えちゃって

びくっとして あわててケータイを開いた

477110

キミは間に合うのかわからなかったけれど

本気かどうかもわからなかったけれど

打ってみたんだろう

(ヨ>NNNNナイチイチゼロ

シイNNNNナイチテン

シNNナイデ)

心臓をつかまれるような暗号

そのまま 電源を切ろうとしたけれど

指が ぶるぶる震えて 切れなかった

ケータイを握りしめたまま

苦笑いをして

屋上から降りた

ただの数字

ただの 特別な数字

こんなものに

こんなものに……

急に緊張が解けて

ボクは 笑い出した

可笑しくて

可笑しくて

たまらなくなった

明日 キミに会ったら

「悪い冗談はやめてよ」って怒るだろう

ボクは にやにやして

「ごめん ごめん」ってあやまるだろう

何事もなかったように

猫

薬師慈 圭

招き入れてしまった

外は寒いでしょう どうぞ

例も言わず すうっと入り込んで

そのまま 私を見つめる

そんなに 見つめないで

悲しくなるから

ミルクを温めましょう どうぞ

ためらいもせず ぺろっとなめて

そのまま 私を見つめる

そんなに 見つめないで

泣きたくなるから

あの・・・一晩泊まってもいいよ

って言ったら

返事もせず すうっと出て行った

あの人みたいに



透明な中に
きらきら映っているのは
本当は収まりきれない
あなたの夢
本当に溢れてやまない
あなたの夢
音もなくはじけて
跡かたもなくなっても
それらは
豊かに 豊かに
空へと溶けて
やがて 現実のあなたの世界に
しっかりと戻ってくる
そう 信じていれば
戻ってくるのだ

しゃぼん玉

薬師慈 圭



この世で 初めて目に映るものは
あなたにとって 温かな世界

この世で 出逢えたすべてのものが
あなたにとって 味方であるように
生まれた奇跡

林檎のような 偶然

大地に包まれて それは必然になる

おいで 今日の中に

目を覚ました小鳥がさえずる朝に

おいで そして明日も

手をつなげば 何も怖くない

この世は あなたを待っていたの

大きな瞳で みつめてごらん

この世は 優しい色でしょう

私があなたを守るから



生まれた奇跡

宝石のような 約束

空に抱かれて それは真実になる

おいで 陽だまりの中に

つぼみが少しずつ咲き始めるころ

おいで きつと明日も

手をつなげば うまくゆくよ

生まれた奇跡

手紙のような 記憶

したためた愛 それは永遠になる

おいでおいで 陽だまりの中に

あなたはいつか 可愛い花になるよ

おいでおいで きつと明日も

手をつなげば うまくゆくよ うまくゆくよ

瞳

薬師慈 圭

傘

薬師慈 圭



はぐらかすのが得意なひとは どこかウソの匂いがする
大事なところで逃げるひとは 大事なところで逃がしてしまう
つまづいても 誰かのせいにせず
苦しくても どうせと思わず
雨が降れば 濡れてしまわず
小さな傘でも さして歩こう

人の気持ちがわからないひとは 自分の気持ちもわかってもらえない
いつでも汗を流さないひとは 汗を流す喜びも知らない
悔しくても 誰かのせいにせず
哀しくても どうせと思わず
雨が降れば 濡れてしまわず
小さな傘でも さして歩こう

間違いを認めないひとは たとえ正しくても認めてもらえない
楽ばかりしたがるひとは 本当の楽つてもものも味わえない
せつなくても 誰かのせいにせず
寂しくても どうせと思わず
雨が降れば 濡れてしまわず
小さな傘でも さして歩こう

僕が君に願うこと

薬師慈 主

ずっと一緒について囁いた口から
ごめんねってうつぶむいて告げた
僕って ずるいね

忘れないうちについて返された鍵
手のひらにあまりに冷たくて
僕は 泣いた

未来を一緒について描いてたのに
過去にとぼとぼと戻っていく
僕って ずるいね

今までありがとうございましたって
なぜ君に言わせているんだろう
君を 泣かせて

どうしようもない 自分の情けなさに
頭を抱えて 唸ってみても
どうしようもない おろかな足元
みつめて みつめて どこへも行けない

どうしようもない たった一つの星さえ
やっと見つけて すぐ見失って
どうしようもない 自分勝手に
もがいて もがいて 何もできない

愛していたんだほんと 君を
最後まで そばにいないと 意味がないのに
ただ 傷つけただけほんと 君を
微笑んで去っていく 愛しい君を

愛していたんだほんと 君を
抱きしめて触れ合ってないと 意味がないのに
ただ幸せでいてと 願うよ 君に
幸せに 幸せに 愛しい君よ



青い空をみて ふと涙が出た

もつと優しくなりたい とつぶやいた

言えないことは やっぱり言えなかった

忘れたいことは やっぱり忘れられなかった

苦しいことは 鳥に聞いてもらった

伝えたいことをそのままにしているのは

自分の為ではなく

そつと ため息に変えて

小さく笑ってみる

優しい人は そうやって

どこまでも優しく

どこまでもせつない

幸せよ どうぞこの人のもとへ



優しい人

薬師慈 圭